

アメリカ合衆国における

「黒人文化論」(その4)

チャールズ・ヴァレンタインの二重文化内化論(2)

中村(笹本) 雅子

Perspectives on “Black Culture”

Biculturation Theory of Charles Valentine

Masako Sasamoto Nakamura

Obirin University, *Obirin Review of International Studies*, No. 7, 1995

桜美林大学『国際学レビュー』第7号(1995年)

Summary

This is the fourth of the serial papers I have been writing under the title "Perspectives on Black Culture," and I would like to express my gratitude to the editors of this *Review* for accepting this awkwardness of publishing the sequel of the papers formerly published in another journal. The subtitles of the preceding three papers are:

- (1) Cultural Identity of Black Americans
- (2) Black Culture: Ethnic or Lower Class?
- (3) Bicultural Theory of Charles Valentine (1)

They appeared in vols. XII-XIV (March 1991-1993) of the *International Culture*, published by The Obirin University International Cultural Research Institute. This publication was terminated last year as a consequence of the reorganization of the institute.

The purpose of this paper is to analyze the "Bicultural Theory," or "Bicultural Model," proposed by Charles Valentine, an anthropologist, to understand the culture and socialization of Black people in the United States. His bicultural model was presented in the "cultural deprivation" controversy in the 1960's as an alternative to "deficit model" and "difference model." The essence of this idea is that a human group can be simultaneously enculturated and socialized in two different cultural systems.

While the previous models emphasized the incompetence of the minority children in the dominant culture, Valentine was unique in that he argued for the competence of minority children, specifically Afro-Americans, in mainstream skills as well as in their distinctive ethnic culture. Nevertheless, he argues that this biculturation of "double competence" tends not to be actualized in performance because of the way the mainstream institutions relate to them. He attributes the failure of these children to the mainstream institutions itself and criticizes the former models for providing the self-justification for this failure.

Closely following a case history of an 8-year-old Afro-American boy to see how a "rather difficult" child was made to be a "psychotic" in the imagination and practice of mainstream professionals surrounding him, Valentine points out that the deficit and difference models are both detrimental to the Afro-Americans in that they are embedded and further strengthen their stereotypic assumptions about the minority people.

Hence, he initially uses the notion of "double competence" to refute the deficit and difference models, and to neutralize the ethnocentrism in the part of the mainstream staffs (teachers and social workers, etc.) by showing Afro-Americans are more competent in mainstream skills than those professionals would expect; and later, he regards the mainstream institutions as responsible for stifling the biculturalization process.

His later work contains further insight and elaboration of the biculturalization model. The first elaboration is that he pays closer attention to the issue of "double consciousness" or "divided identity." The second is that he emphasizes more than before the truncation of biculturalization.

In this process, he draws more heavily on the work of W. E. B. DuBois. He recognizes DuBois's famous remark about the "twoness" of black people as a classical statement of biculturalization, and he understands the concept of "double consciousness" as the idea DuBois used to clarify the impact of the surrounding white world on the inner life of black people."

My analysis of Valentine's argument is motivated by my interest to construct a view of cultural articulation which is not that of plural hierarchies. Valentine's biculturalization model which emerged from the controversy in the 1960's merits the serious consideration by those interested in the present arguments around the issue of multiculturalism.

* * *

はじめに

本稿は『国際文化研究』（桜美林大学国際文化研究所紀要）に掲載された小論¹⁾の続編にあたるものである。国際文化研究所の再編（1993年度）にともなう『国際文化研究』の廃刊で中途になっていたところ、『国際学レビュー』に掲載の機会を得ることができたことをここに感謝したい。

1. 「抑圧された二重文化内化」への着目

すでに「アメリカ合衆国における『黒人文化論』（その3）」で述べたように、文化人類学者チャールズ・ヴァレンタイン（Charles Valentine）が提起した二重文化内化モデル（Biculturalization Model）は、1960年代の「文化剝奪論」論争のなかで、欠陥モデル（Deficit Model）と差異モデル（Difference Model）の双方を批判するものとして提起されたものであり、その初出の段階では「二重能力論」（double competence）として主張されたものであった。²⁾

人間集団は二つの異なった文化システムに同時に同化あるいは社会化され得るとするのが「二重文化内化」の概念の要点であり、ヴァレンタインはこれを集団に即しては「黒人コミュニティーの二重文化的ダイナミクス」³⁾と表現し、個人のレベルでは「二重の社会化」（dual socialization）とも表現している。

メインストリームの支配的文化と社会の下位集団であるエスニック集団の文化の、二つの文化を内化した状態をヴァレンタインは「二重能力」ととらえるのであるが、同時に、マイノリティーの子どもたちの学業不振の問題とかかわって、かれらがその能力を学校や社会において発揮できないでいることを彼は問題にしていた。彼は、この点について、「アフリカ系アメリカ人が学ぶメインストリーム文化の内容の大部分は潜在的可能性として保持されるにとどまり、日常の行動において現実の実践として生かされることは少ない」⁴⁾と述べている。このことを彼は「メインストリーム文化の受動的獲得」と呼んでいるが、マイノリティー集団が支配的文化への同化によってメインストリームの様式に精通しているにもかかわらず、それを実際に行動に移す機会がほとんど得られないというこの実践上の困難を、彼は「貧困、差別と隔離の構造的条件」に帰せられるべきものと考えている。⁵⁾

しかし、問題は、かれらがこの「貧困、差別と隔離の構造的条件」によってメインストリーム文化の実践能力の発揮を妨げられていることにとどまら

ない。二重文化内化のプロセスそのものが阻害されるケースにも、ヴァレンタインは注目する。

その例としてヴァレンタインが示すのは、学校や病院などのメインストリーム諸機関において「手に負えない危険人物」で「精神障害がある」とされてしまった、ある黒人少年のケース・ヒストリーである。⁶⁾ 1971年の『ハーバード・エデュケーショナル・レビュー』の論文において、7ページにもわたって冗長とも言えるほど詳細に述べられているこの少年のケースの概要を、少々長くなることを覚悟して、ここで紹介しておくこととしたい。このケースが「抑圧された二重文化内化」とヴァレンタインが呼ぶ事態の典型例として示されたものであり、それが具体的にどのようなことをさすものかを理解する手がかりになるからである。

その少年はヴァレンタインが初めて会った時には8歳になっていた。父親は妻（少年の母親）を殺害した罪で服役中であり、彼はその事件後にひきとられた、南部の農村部の養父母のもとから、北部都市部に住む親類にひきとられて1年が経ったところだった。⁷⁾ 公立小学校で「手に負えない問題児」とされた彼は、放校処分になり、病院の検査では「精神障害がある」との診断を受ける。その少年の住むゲットー・コミュニティに住んで文化人類学者としての調査に携わっていたヴァレンタインは、その新しい養父母の要請によって少年とかわることとなったのである。記録の探索や聞き取り調査、その他のさまざまな接触から、彼は少年の生い立ちと、彼の遭遇した問題を次のように描き出す。⁸⁾

少年の故郷は南部の農村部で、妊娠・出産時および幼少時には脳障害につながるような問題は記録されていない。親類で精神病の診断を受けたことがあるのは一人だけで、それは彼の父親が妻を殺して服役してからのことである。非常に暴力的で専制的な父親と、夫におびえつつ少年を溺愛した母親のもとで育てられた彼は、貧しいけれども安定していた母方の祖父母の家で、兄弟姉妹と一日の大半を過ごしていた。嫉妬深い父親は妻にそれ以外の交際を許さなかったため、家族としては孤立しており、少年は祖父母の家をこえる社会的接触をほとんどもっていなかった。彼は母親が父親に殴られるのを見て育ち、自分も頻繁に殴られていた。父親が母親を殺したのは彼が6歳の時であるが、彼が現場にいたわけではないことは、祖父母の家にひきとられた年上の兄姉が証言している。少年は周囲からは、活動的で利発、時として攻撃的で反抗的と見られていたが、父親以外の大人との関係は良好だった。誰も彼を「手に負えない」とは感じていなかったし、精神障害があるなどと

は思ってもみないことだった。

父親による母親殺害の事件後、少年は南部の農村部の黒人家庭にひきとられる。ここでも彼は、特に行動上の目立った問題もなく、養父母と安定した関係を築いていた。

しかし、彼はこの年、彼にとっては初めて、より広いマクロの社会との接触を体験することとなる。それはその後の彼の困難を予測させるものだった。家族や親しい大人と一緒にいれば、彼は教会への参列など、社会との接触においても特に問題をおこしたことはなかった。しかし、夏に参加したヘッド・スタート・プログラム⁹⁾において、早くも彼は問題児のレッテルを貼られてしまう。少年が一人で、メインストリーム文化の、よそよそしく、親しみにくい状況の中におかれた時に、問題が起こったと言える。その時の教師が彼の印象として憶えているのは「自分の席にじっと座っていることができず、静かにできない子」だったということである。中産階級の、そのほとんどが白人であるヘッド・スタート・プログラムのスタッフは、彼の多動性 (hyperactivity) と反抗的な態度 (disobedience) を、秩序を乱す、手に負えないものとみなしたのである。その同じ年に、軽い手術の必要があって病院に入院した時には、彼がベッドにじっとしていず、目を離すとすぐにいなくなってしまうので、病院から帰されてしまったことがあった。このように、ヘッド・スタートの教室や病院などのメインストリームの諸機関に一人で対応しなければならなかった時に少年は問題を起こしていたが、しかし、これらの問題は彼と養父母の関係を損なうことはなかった。

ヴァレンタインは、ここまでの事情を次のように解釈する。少年は人生の最初の6年間において、暴力的で専制的な父親のもとで情緒的剝奪 (emotional deprivation) を経験し、基本的な人間関係の形成が阻害された。しかし、その情緒的剝奪は、祖父母の家庭での健康な人間関係によって十分補償され、最初の養父母のもとでの養育によってもその影響が軽減されるものだった。この点にかかわって、ヴァレンタインは、アフリカ系アメリカ人のサブ・カルチャーにおいて、構造的な事実として、また社会的な期待としても、家族の親密さは、親のあり方に特に注目する、視野が狭く硬直したメインストリームの規範にくらべて、非常に多様化されており柔軟性があることに注目しなければならないと指摘している。この期間には、少年はアフリカ系アメリカ人の家庭と彼をとりまくミクロな社会には、正常な範囲内でよく適応していたと言える。ここでは彼の勝手気ままとも見える行動様式は容認され、必要があれば、サブ・カルチャーの規範によって難なく統制されていた。二

重文化内化のプロセスが始まる幼児期に家族が社会的に孤立していたため、少年はメインストリームのマクロな社会状況に対する準備をほとんど受けられなかった。彼の行動様式は、メインストリーム文化の基準では受け入れられるものではなかったが、この時に、教師や医療関係者などメインストリームの諸機関のスタッフは、彼を落ち着かせてかれらの受容できる範囲にその行動を統制することができなかった。かれらは彼と親密な関係を結ぶことができなかつたし、このような場合に対処するサブ・カルチャーの知恵も持ち合わせていなかったのである。このような状況において、すでに遅らされていた二重文化内化のプロセスがまたしても機能不全に陥ったとヴァレンタインは指摘する。ここまでの段階でも、少年に精神異常や器質性の欠陥は見られない。

これまでのヴァレンタインの叙述と解釈から、「抑圧された二重文化内化」について予備的に考察しておこう。ヴァレンタインが少年に器質的欠陥が見られないことを繰り返し述べているのは、少年の問題が社会的なものであることを確認しておくためである。

少年にとっての二重文化内化の抑圧の第一は、幼少時に父親によって社会との接触を制限されたことである。つまり、二重文化内化の、「メインストリーム文化の側面における社会化の阻害」が現実にあったということである。これは、この少年にとっては父親の意向によるものとされているが、ゲットー・コミュニティにおいては、望むと望まざるとにかかわらず、メインストリーム社会からの隔離が強制されている場合もあることを考慮しなければならないだろう。少年の父親は、妻の実家以外には家族を出入りさせなかつたという点で、黒人コミュニティにおける社会化をも制限した極端な例と考えられる。

二重文化内化の抑圧の第二の問題として考えておく必要があるのは、生活の場であるコミュニティにおいては特に問題児とはされていない彼が、メインストリーム文化に直面する場においては「問題児」とされるという事実である。その要因の一つとしては、ヴァレンタインも指摘するように、二つの文化における同じ行動様式に対する許容度の違いが考えられるだろう。コミュニティの文化においては特に問題ないとされていた行動様式が、メインストリーム文化の基準では許容されずに「問題」と見なされるという局面である。

しかし、ヴァレンタインが示唆はするもののはっきり述べていないことであるが、少年にとっての自分を表現する「場」の違いということも、大きな

意味をもっているのではないだろうか。そして、このことから導き出されるのは、実際に問題にされなければならないのは、メインストリームの側から専門家として彼に対応する人々の、無理解と無能力であるということである。かれらは少年が家庭やコミュニティーではどのように行動し、まわりの人々が彼とどうつきあっているのかを理解していない。にもかかわらず、かれらは、少年が一人でなじみのないメインストリームの場に対処しなければならないという、彼にとっては「異常な」場面での行動をとらえて、彼を評価する。ここでの二重文化内化の抑圧というのは、彼の生活が二つの文化にまたがるものであることを理解せず、したがって、彼がふだんなじんでいる状況ではどう行動し、まわりの大人がどう対処しているかに思いをめぐらすこともしないために、コミュニティーにおける彼の行動や能力を評価することができない、メインストリームの側の専門家の対応によってもたらされるものである。つまり、第一の問題から導かれるメインストリーム文化における社会化の不足と、そこからもたらされるメインストリーム場面での不適応をもってのみ彼を評価する、メインストリーム側の専門家の対応は、メインストリーム文化との接触によって当然期待されるはずだった第一の問題の「補償」として機能しなかったばかりでなく、一面的な接触と理解によって、その後の少年の二重文化内化を通じた発達を阻害さえする要因となったのである。

続いて、ヴァレンタインが北部都市部のゲットーで少年に会った時の彼の状況を見てみることにしよう。1969年、8歳の彼は、明らかに多動 (hyperactive) であり、目立って攻撃的であり、非常に反抗的であるが、手に負えないというほどではなかったとヴァレンタインは述べている。彼は新しい、北部の都市部のコミュニティーの養父母 (同じく南部の農村部出身で親類にあたる) と温かい関係を築いている。近所の子どもたちとも安定した関係をもっており、新しい環境にもなれ、小遣い稼ぎにちょっとした仕事をやることもでき、地域のボーイスカウトの組織にくわわって活動もしていた。

しかし、彼は地元の公立小学校で「学習不能」で「手に負えない乱暴児」であるとされてしまった。教師の報告によると、彼は教師たちの言うことを聞かず、他の子と喧嘩をはじめたりして、さまざまなやり方で授業を妨害した。学校のガイダンス・カウンセラーは、この少年は「悲劇的に不安定な家庭生活によって精神的に深い傷を負っている」と結論づけ、彼の記録に「彼は自分の父親が母親を殺害する現場を目撃した」という誤った記載をつけくわえてしまった。少年の北部での親類や知り合いの誰も、この事件の事情を知らないので、どのようにこの誤りが生じたか、詳細は不明だとヴァレンタ

インは言う。少年自身を含めて、そのコミュニティの誰一人として、彼が殺人現場を目撃したなどと証言する者はいない。ヴァレンタインらが調査のために彼の生まれ故郷を訪れるまで、この間の事情は彼の南部の親族の一部と、数人の医師にしか知られていなかったのである。それにもかかわらず、このありもしなかった、「父親による母親の殺害現場目撃」という「精神的外傷」が、それ以後彼にかかわるすべての教育・福祉・医療の専門家によって、彼の重大な精神病理の原因として言及されることとなったのである。

このカウンセラーと校長が少年の放校処分の決定をするのであるが、これは聴聞などの所定の手続きをふまえたものではなかった。この頃にはすでに少年は近くの精神病院の通院患者になっている。そこで彼は、インタビューやテストの結果、「精神遅滞と器質的損傷の可能性のある小児精神分裂症」と診断され、鎮静剤が処方された。¹⁰⁾

その後、数カ月、少年はゲットーで気ままに暮らしていた。このコミュニティでの彼の生活は、最初の養父母のもとでの生活と同様、家族や仲間の目から見れば順調であり、彼の行動も容認できる範囲のものだった。しかし、彼が学校を放校になり、精神異常であるとされて以後、彼と家族や地域の関係は緊張をとまなうものとなってしまふ。養父母は、彼がゲットーで安全に過ごせるかを心配し、何とか学校に戻れないかと考えるが、それが彼との軋轢をも生んでしまふ。

ヴァレンタインが彼に初めて会ったのは放校処分後のことである。少年や養父母、近所の人に話を聞いたヴァレンタインは、養父母の許可と要請のもと、まず、学校と病院にその事情を確かめに行く。それと同時期に、地元の病院ではその少年を州立の精神病院へ送ることを決定してしまつた。¹¹⁾ 少年の行動や状況が以前と変わらなかつたにもかかわらず、この送還が決定されたのは、ある精神科医がこの少年について「彼自身および周囲の人すべてに対しての危険な存在である」と表明したことを根拠としていた。この措置は、コミュニティの公民権活動家グループや住民の抗議で見送られることとなつたが、その時の妥協案として、改めて彼が別の病院に一時的に入院して、第三者による再検査を受けることになつた。しかし、医師同士のつながりから、この再検査は全く「予断のない、独立した」ものとはならなかつた。さらに問題だつたのは、彼を受け入れた病院で彼が「脅威」と受けとめられてしまつたことである。彼を受け入れることになつた経緯から、かれらは公民権運動の活動家たちが病院の実態を差別的・反黒人的であると糾弾するため少年を送り込んできたと思つたらしいとヴァレンタインは述べる。ここで

の少年の体験は、このことによって、悲惨なものとなる。病院のスタッフはあからさまに彼に敵対的な態度をとり、何時間も拘束服を着せることもあった。ヴァレンタインが病院に彼を訪ねた時、今までに見られなかった二つの顕著な変化が生じていた。一つは、彼がこの強制入院を心底憎んでいたことであり、もう一つは、病院のスタッフが「化学的拘束服」と呼ぶ薬の影響で、少年が生気を失っていたことだった。この病院で少年にかかわった医師やスタッフをインタビューしてわかったことは、かれらがこの8歳の少年に「ほうっておけば病院を破壊してしまう」と恐れるほどの破壊力を投影していたことだった。彼の話白人スタッフがよく理解できなかったため、「スピーチ病理」という診断も新たにくわわっていた。病院のスタッフは彼がそこに送られてくるまでの彼の通常の生活をほとんど知らず、彼についてのわずかな知識は彼の精神病理のカルテと病院のソーシャル・ワーカーが作成した、誤りや歪曲に満ちた家族の記録だけだった。

病院の心理学者は彼の知能を WISC テストによって「境界的」と判断したが、他のテスト方法では学習能力は優れているという結果だった。ロールシャッハや他の心理テストでは彼の知能は正常で精神異常の徴候はないとされた。神経科の医師は器質的な障害は認められないとした。この結果にもかかわらず、二人の精神科医がこの少年は確かに精神異常であり、恐らく脳障害があり、精神遅滞があると主張したため、実際にテストをした人たちもこの解釈に合うように自らのテスト結果を再解釈してしまった。さらに、少年が言っていることは事実であったにもかかわらず、それが幻覚症状の証拠とされてしまった。彼は「社会で普通に生活するのは不可能で、遅かれ早かれ再入院を要する」という診断付きで家に返された。こうして、マクロ社会の機関とのかかわりによって、彼には精神異常のレッテルが貼りつけられてしまったのである。

ヴァレンタインはここまでの経緯について、はじめの養父母のもとから2番目の養父母のもとに移された時に、少年は発達上の後退を余儀なくされたであろうとみている。幸いなことに、新しい養父母も彼を大事にし、温かく見守っていた。養父母の人柄にくわえて、再び、文化的に規定されたアフリカ系アメリカ人の家族関係の柔軟性がここでも重要な役割を果たした。そして、家族と近隣の人々との関係という点では、少年はこのコミュニティーでも問題なく適応することができたのである。彼のまわりにいた人々は、彼を「少々社会性に欠けるところがあり、幼稚なところもあって時として閉口するが、それだけのこと」ととらえていた。

しかし、前にも見られた、「状況によって抑圧された二重文化内化」の問題による困難が、今度は危機的レベルであらわれる。メインストリームのマクロ社会の専門家たちは、彼を「内的コントロールを欠いた者」としてとらえた。そして、かれらの対応によっては、この患者の行動を改善することはできなかった。日常の業務が攪乱されることを嫌う気持ちから、ゲッターの住人に対する人種的対立の感情やステレオタイプ化された嫌悪感にいたるまでのさまざまな感情から、かれらは少年に混沌をもたらす破壊力のある怪物のイメージを付与したのである。そのような彼の破壊可能性が現実の脅威とならないように、彼の力は封じ込められねばならないというのがかれらの結論だった。

このようにメインストリームの教育・医療諸機関は、彼の社会化の過程におけるギャップを埋めるどころか、またしてもそのギャップを拡大してしまったのである。彼はまだ読み書きができず、挫折や拒絶に慣らされてしまっている。彼の保護者である養父母は、自分では本当とは思えないメインストリーム機関による公式の診断を拒否しきることができない。この状況が続けば、彼にとっての唯一の希望である養父母との関係が損なわれることになってしまうことをヴァレンタインは懸念している。

以上、見てきた、少年の北部都市部におけるメインストリーム諸機関とのかかわりの中に、抑圧された二重文化内化の第3の問題が典型的にあらわれている。それは、異文化間の接触における「不安の投影」と「ステレオタイプ化」の問題である。異文化間の不適應はその両者のあり方によって規定されるにもかかわらず、そのことに無自覚であるために事態をさらに悪化させたのが、メインストリームの側の専門家であった。

この少年のケースに関わったソーシャル・ワーカー、学校の教師、精神科の医師などに会って、彼とのかかわりについて聞き取り調査をしたヴァレンタインは、これらの人々の彼のとらえ方が、アメリカ黒人の心理についての欠陥モデルと差異モデルの双方を包含した、非常に画一的なものであることを見出す。¹²⁾ これらの人々においては、かれらがその一員として働いている学校や病院などのメインストリームの諸機関が、その少年のかかえるさまざまな問題に部分的にでも責任を負っているかもしれないという考察は、入り込む余地がないとヴァレンタインは指摘する。¹³⁾ 彼によれば、「かれらが当然の前提としているのは、その少年が直面する困難のすべての源泉が、彼自身と家族とコミュニティーにあるに違いないというものである。」¹⁴⁾ 彼のファイルに誤って書き込まれた「父親の母親殺害の目撃」は、以後、彼の行動

を理解するための枠組み——「家庭崩壊」と「幼時期の精神的ショック」——として、専門家から専門家へと受け継がれていったのであるが、これは、偏見が偏見を生み、それが固定化された例の一つと言えよう。

ヴァレンタインはこの問題を「二重文化内化のプロセスにおけるメインストリーム諸機関の側の失敗」¹⁵⁾であるとするが、それはこれらの諸機関の専門職者たちが、その少年の境遇を改善しないばかりか「長期にわたって、少年の問題をさらに困難なものにすることしかしてこなかったために、今やかれらこそが現在の不幸な事態の主な原因になっている」¹⁶⁾からである。このことから、ヴァレンタインは、「アフリカ系アメリカ人のパーソナリティーの損傷の大部分は、二重文化内化のプロセスの肝要な部分を抑制するか、あるいは完全に妨げる、メインストリーム諸機関の標準的な作用に直接その原因をたどることができる」¹⁷⁾と主張する。

これらの専門職者たちに理論的基礎を提供している欠陥モデルと差異モデルの双方は、したがって、「アフリカ系アメリカ人のゲットー・コミュニティーを最も直接的に侵害する、メインストリーム文化のある側面に属するものである」¹⁸⁾として、ヴァレンタインは批判するのである。

このような議論から、彼は二重文化モデル (bicultural model) あるいは二重文化内化モデル (biculturation model)¹⁹⁾のほうが、欠陥モデルや差異モデルよりも、アフリカ系アメリカ人のコミュニティーや人々をとらえる視点として、二つの点において優れていると主張する。第一の点は、このモデルのほうがアフリカ系アメリカ人の現実に即しているということである。第二の点は、二重文化内化のプロセスを認識することが、黒人コミュニティーにおけるサービス提供を受け持つメインストリーム諸機関の実際の業務を、望ましい方向に改善することにつながる見込みがある、ということである。

黒人コミュニティーで働く専門職者の変化としてヴァレンタインが望むのは、かれらが「エスニック文化の正統性 (legitimacy) と創造性 (creativity) を認めるだけでなく、アフリカ系アメリカ人が、他の多くの人々が一般に思っている以上に、すでにメインストリーム文化に精通していて有能でもあることを正当に評価すること」²⁰⁾である。後者の点、つまりアフリカ系アメリカ人のメインストリーム文化における能力を他の人々がもっと認識するという点は、差異モデルよりも二重文化内化モデルのほうが、メインストリーム文化の側のエスノセントリズムを中和することが期待できるとヴァレンタインは主張する。それは「二重文化的認識は、メインストリームの側のアメリカ人が、もし現実を受け入れさえすれば、かれらのエスノセントリズムにもか

かわらず尊重することのできる、アフリカ系アメリカ人の精神的・文化的健全性への着目を促すからである」(強調はヴァレンタインによる)。²¹⁾

ヴァレンタインは、二重文化内化モデルに基づく職場や学校などでの改革の具体的な処方箋は、この段階では提示していない。メインストリーム文化の側の専門職者たちの認識枠組みや、かれらの他者に対する態度の変革の必要性は、差異モデルの提唱者たちも強調していたことを考えるならば、問題は差異モデルと二重文化内化モデルのどちらがその課題を達成する可能性において優れているかということになるだろう。²²⁾

ここでは、欠陥モデルとその批判としての差異モデルが、「言いかえ的文化差異論 (Euphemistic Difference Argument)」²³⁾を媒介項として、すでに確立された思考枠組みの中で整合的に結びつき、「アフリカ系アメリカ人の文化は特異的であるだけでなく病的である」²⁴⁾という見方を生み出していたという状況の中で、差異モデルにとっては欠陥モデルとの結合を断ち切ってその批判的対案としての役割を果たすことができるかどうか課題となっていたこと、それに対してヴァレンタインが課題としたことは、二重文化内化モデルを、欠陥モデルと差異モデルの双方およびそのさまざまな結合形態を批判し、それらにとって代わるべき認識枠組みとして対置することであったということ、確認しておきたい。

すでに述べたように、ヴァレンタインの「二重能力論」としての二重文化内化モデルは、アフリカ系アメリカ人のメインストリーム文化における有能さへの注目を促すことによって、欠陥モデルと差異モデルの双方を、「メインストリーム文化を身につけていないわけではない (欠陥モデルに対する批判)」し、「ただメインストリーム文化と違う文化をもっているだけではない (差異モデルに対する批判)」として批判し、さらに、その有能さが現実に発揮されない要因をメインストリームの諸機関の機能に求めるものであった。

しかし、このメインストリームの諸機関の機能への注目は、「二重能力をもちつつ発揮の機会が限られているためにそれが認識されない」という問題におけるそれら諸機関の役割にとどまらず、この二重文化内化のプロセス、つまり二重能力形成期における、メインストリーム諸機関の破壊的介入の問題として、ヴァレンタインが意識せざるを得なくなった問題につながるものだったのである。ヴァレンタインが提示した少年の例に即して、以上で考察したように、メインストリーム諸機関の破壊的介入とは、「異文化における不適応行動の一面的評価」であり、「異文化間葛藤の不安の一方的投影」であり、「ステレオタイプ化による問題の創造と固定化」であった。別の角度から見れ

ば、メインストリーム文化による「二重文化内化」の形成場面における介入と発揮場面における介入——これらが「抑圧された二重文化内化」(truncated biculturation) の二つの側面であるにとらえることができる。

2. 「分裂したアイデンティティー」の提起

以上、検討してきた、1969年のアメリカ心理学会シンポジウムでのヴァレンタインの報告をもとにした1971年の二つの論文では、その抑圧も含めて、「二重能力論」が彼の二重文化あるいは二重文化内化モデルの主要なモチーフであったとあってよい。

しかし、1972年に出版された、黒人研究 (Black Studies) と文化人類学についての包括的な論文²⁵⁾ においては、二重文化内化モデルに新たな視点がくわわり、モデルのさらなる発展が認められる。その第一の点は、「二重の自意識」(double consciousness) あるいは「分裂したアイデンティティー」(divided identity) と表現される問題を、ヴァレンタインが綿密に検討している点である。この論点は、1971年の二つの論文においては、簡単に触れられていたに過ぎないものであった。第二の点は、二重文化内化の抑圧の側面がこれまで以上に強調され、論点の中心ともいえる位置を占めるようになったことである。

第一の点から、見ていこう。「二重の自意識」あるいは「分裂したアイデンティティー」と表現されるこの問題について、ヴァレンタインは1969年のシンポジウムでは全く触れていない。彼がこの問題に言及するのは1971年の『ハーバード・エデュケーション・レビュー』の論文においてであるが、そこで彼は他の黒人学研究者²⁶⁾ を、ポルガー²⁷⁾ が提起した二重文化内化の概念の重要性を無視あるいは過小評価しているとして批判し、次のように述べている。

二重文化内化とは、アフリカ系アメリカ人という呼称そのものにまさに象徴される、分裂したアイデンティティーの真髄であり、デュボイスとホワイトから、エリソンとボールドウィンを経て、ファノンとクリーヴァーにいたる、すべての名だたる黒人の芸術家や学者によって讃えられ、劇的に表現され、また悼まれもしてきたものなのである。²⁸⁾

ここでは、ヴァレンタインは、二重文化内化の概念が、アフリカ系アメリカ人とかれらの研究に携わるものにとって、いかに本質的なものであるかを示

そうとしている。彼は、なかでも特に、文化人類学者のウルフ・ハンネルツを、ゲットー・コミュニティの研究においてこの概念の妥当性に言及しているにもかかわらず、その重要性を見落としているとして批判する。彼はハンネルツのデュボイスへの言及に触れて、次のように述べる。

実際、ハンネルツが彼の著書をデュボイスの『黒人のたましい』の引用ではじめていることは、逆説的である。引用されているのは、デュボイスが「二重の自意識」とアフリカ系アメリカ人の生活の「二重性」(two-ness)について述べているところであり、その部分はまさしく、その本来的な意味での二重文化内化の古典的な表明なのである。²⁹⁾

ハンネルツが引用しているのは、黒人の二重性を論じたものとして有名な、デュボイスの次の一節である。

黒人はいつでも自己の二重性を感じている。それは、アメリカ人であることと黒人であることである。二つの魂、二つの思想、二つの闘い、二つの対立する思想が黒い体に宿っている。³⁰⁾

ヴァレンタインがここで、デュボイスのこの一節を「その本来的な意味において」の二重文化内化の古典的表明であると認識していることに注目しておきたい。この「本来的な意味において」というのは、デュボイスがこの表現において提示しているものこそ二重文化内化の事実に他ならないということである。

1971年の論文の、ここでの議論の展開で見ると、ヴァレンタインが二重文化内化のこの側面——「分裂したアイデンティティー」と「二重の自意識」——をとりあげているのは、二重文化内化の概念をこの側面と結びつけてアメリカ黒人の思想史の系譜に位置づけることによって、二重文化内化の概念に正当性を付与することが、その主な動機となっていると考えてよいだろう。

それに対して、1972年の論文においては、ヴァレンタインはデュボイスの議論からさらに多くをくみとろうとしているといえる。この論文では、彼は「二重の自意識」の概念を、デュボイスが「黒人をとりまく白人世界の、黒人の内面への影響を明らかにするために」³¹⁾使ったものであるととらえ、それ故に、デュボイスの思想の核心にあたるものと理解する。そして、二重文化内化のプロセスを認識し、検討することは、アメリカ黒人の「二重の自意識」についてのデュボイスの基本的な洞察を、現代において発展させることであると述べるのである。³²⁾

ヴァレンタインが自らの理論的課題をこの筋でとらえていることは、明らかであろう。デュボイスの「二重の自意識」を、「分裂した自意識」(divided consciousness)と「二重の文化的アイデンティティー」(twofold cultural identity)の自覚と解釈するヴァレンタインは、さらに、自らの「二重能力論」としての「二重文化内化」の理解を、それをこえるものとして提示する。彼はこれを次のように述べている。

集団としての存在と生活に一貫性と継続性を保つために、アフリカ系アメリカ人に必要とされてきたことは、分裂した自意識や二重の文化的アイデンティティーの自覚にとどまるものではない。その過程で常に発達せしめられてきたのは、二重の文化的能力(double cultural competence)の諸方策なのである。³³⁾

これに続いて、ヴァレンタインは、「どのように、どのような過程を経て、この二重能力を達成し、さらに発展させ、維持することが可能だったのだろうか」³⁴⁾という問いに対する答えの萌芽は、ポルガーが明らかにした二重文化内化の概念に見出されると述べる。このように、彼はデュボイスとポルガーの両者の理論を関連づけることによって、二重文化内化論における自らの理論的貢献を位置づけるのである。

3. 「抑圧された二重文化内化」とメインストリーム文化

1972年の論文に見られる、ヴァレンタインの議論の展開の特徴の第二点は、二重文化内化がいかにかに抑圧されるかを強調していることであり、その抑圧においてメインストリーム諸機関が果たしている役割について、これまで以上に厳しい批判を投げかけている。彼は今や、「二重文化内化は、決定的に、しかも残酷に、支配的な社会経済システムによって制限されてきた」³⁵⁾と声明するのである。

この二重文化内化の抑圧は、それを構成する二つの文化のそれぞれに作用するとヴァレンタインはとらえている。その一つはエスニック文化の抑圧である。彼は、この側面について、「奴隷制時代以来、民族的に特異な文化のパターンは負の烙印を押され、抑圧され、存亡の危機にさえさらされている」³⁶⁾と述べている。その一方で、二重文化内化のメインストリーム文化、すなわちヨーロッパ由来のアメリカ文化の獲得の側面は、「支配的集団の必要に即して設定された狭い範囲に限定され」³⁷⁾てきたために、「ヨーロッパ由来のアメ

リカ文化の技能の最低限の獲得」³⁸⁾しかもたらさなかったと、彼は述べるのである。

このような結果をもたらしたメインストリーム諸機関は、「メインストリーム文化のゴールを教えはするが、その技能を授けたり、それを実現可能にするために必要な機会を与えたりはしていない」³⁹⁾という役割を果たしているとするヴァレンタインは、ゲットー地域の公立学校をその典型と見なしている。

以上見てきたように、ヴァレンタインによる二重文化内化モデルの初発の動機は、「二重能力論」の提起によって欠陥モデルと差異モデルの双方を批判することであったが、「二重文化内化」のプロセスを阻害するのが実はメインストリーム文化の作用に他ならないという着目は、二重文化内化の双方の部分に阻害的に作用するメインストリーム文化の批判的分析を彼に要請することとなる。彼の理論的課題は今や、「どのようなプロセスで、この二重文化内化が窒息させられ、抑圧されるかの解明」⁴⁰⁾として自覚化されるのである。

文化剝奪論論争におけるヴァレンタインの理論的貢献は、メインストリーム文化との関係においてマイノリティーの文化を「欠陥」があるものと見なす欠陥モデルと、両者の「差異」がマイノリティーの側に不利に作用していることへの注目を促す差異モデルの双方を、マイノリティーの側のメインストリーム文化における予想以上の有能性の主張によって批判し、さらにその「二重文化内化」を抑圧するものとして、支配的なメインストリーム文化そのものの質を吟味する視点を確立したことにあるといえる。

しかし、彼の黒人の「二重性」の把握は、二重能力論を正当化する一つの前提として位置づけられたために、その理論的可能性を十分展開する道が閉ざされてしまったことは否めない。彼の「二重能力論」が、マイノリティーの側の、メインストリームの側の「予想をこえる」力量を示唆するにとどまらず、真の意味での二つの文化における有能さとして実現するためには、マイノリティー文化に対する時の「一面的評価」や「葛藤・不安の投影」や「ステレオタイプ化」を、メインストリーム文化の側が克服することが課題となる。メインストリームの側がマイノリティーの諸文化との共存のために譲歩するという構図でなく、求められているのはメインストリーム文化の側の変革であるということ、ヴァレンタインに学んで確認するとともに、現在の多文化主義の議論がこの課題にどのようにコミットするものであるかの解明を、筆者の今後の課題としてひきとりたいと考える。

注

- 1) 「アメリカ合衆国における「黒人文化論」(その1)——アメリカ黒人の文化的アイデンティティー」『国際文化研究』第12号(1991年3月): pp. 21-37
「アメリカ合衆国における「黒人文化論」(その2)——黒人文化の概念化をめぐる論争」『国際文化研究』第13号(1992年3月): pp. 19-30
「アメリカ合衆国における「黒人文化論」(その3)——チャールズ・ヴァレンタインの二重文化内化論(1)」『国際文化研究』第14号(1993年3月): pp. 17-28
- 2) 上記第3論文の目次は以下のとおり。
 - I. はじめに——「文化剝奪論」論争とチャールズ・ヴァレンタイン
 - II. チャールズ・ヴァレンタインによる欠陥モデルと差異モデルの批判
 - III. チャールズ・ヴァレンタインの二重文化内化論——「二重能力論」としての提起本論文における1、2、3節はそれぞれ、前編とのつながりではIV、V、VI節にあたる。
- 3) Charles Valentine, "Deficit, Difference, and Bicultural Models of Afro-American Behavior," *Harvard Educational Review* 41 (May, 1971), p. 143.
- 4) *Ibid.*, p. 144.
- 5) *Ibid.*
- 6) *Ibid.*, pp. 147-53.
- 7) なぜはじめの養父母のところから、親類である第2の養父母のところに移ったのかの経緯には、ヴァレンタインは触れていない。
- 8) ヴァレンタインは、次のような調査と接触に基づいて、このケース・ヒストリーをまとめている。
 - ①北部の都市部コミュニティでの、3カ月にわたる日常的接触による少年の行動の観察。彼の養父母、その家族や近所の親類、遊び友達などとも緊密に接触した。
 - ②その後の3カ月半にわたる彼の精神病院入院中に、毎週病院を訪問し、彼の一日の状況を観察。
 - ③彼が生まれたコミュニティでの1週間にわたる聞き取り調査。緊密なつながりをもっていた親類10人、はじめの養父母の家族全員、彼とかかわった医療・福祉・司法・矯正関係の専門職者14人とのインタビューにくわえ、彼についての医療・行政・警察関係の記録や関係書類も収集した。
 - ④彼が精神病患者としての治療を受けた北部の二つの病院での医療記録。
- 9) マイノリティー児童や貧困家庭の児童を対象とした補償教育プログラムの一環。学校での学習に適応できるように、就学前に学校的環境のもとで生活させ、基本的な生活習慣の指導や文字・数の学習への導入を行う。
- 10) 放校処分の後、彼が通院をしていないことから判断すると、この診断は彼の放校処分のために必要とされたという可能性もある。
- 11) ヴァレンタインの介入が少年の事情をさらに紛糾させた可能性もある。この点についてヴァレンタインは触れていないが、彼自身による総括がぜひとも必要であろう。
- 12) Valentine, "Deficit, Difference, and Bicultural Models of Afro-American Behavior," p. 153.
- 13) *Ibid.*, p. 154.
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*

- 16) *Ibid.*
- 17) *Ibid.*, pp. 155-56.
- 18) Charles Valentine, "It's Either Brain Damage or No Father: The False Issue of Deficit vs. Difference Models of Afro-American Behavior," in *Toward Social Change: A Handbook for Those Who Will*, ed. Robert Buckhout (New York: Harper and Row, 1971), p. 126.
- 19) ヴァレンタインはこの二つの表現を互換可能なものとして使っている。
- 20) Valentine, "It's Either Brain Damage or No Father," p. 133.
- 21) *Ibid.*
- 22) この問いに実証的に答えることは難しいが、現在注目されている多文化主義の思想の基底が差異モデル的認識にあるのか二重文化的認識にあるのかを思想史の問題として検討することは、現段階においての重要な研究課題となると思われる。
- 23) 呼びかえ的文化差異論 (Euphemistic Difference Argument) は、文化剝奪論における「剝奪」を、表現が不適當であるとして「差異」と言いかえるもので、欠陥モデルにおいて主張される「欠陥」の存在を否定する差異モデルとは区別されるべきものである。呼びかえ的文化差異論について、詳しくは、中村(笹本) 雅子「アメリカにおけるマイノリティー児童の文化と教育をめぐる論議の展開——1960年代を中心として」竹市良成編『アメリカ教育における等質とエクセレンス追求の史的研究』(昭和62年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書、1988年、アメリカ教育史研究会)、229~240ページ、特に、p. 232を参照されたい。
- 24) Valentine, "Deficit, Difference, and Bicultural Models of Afro-American Behavior," p. 154.
- 25) Charles Valentine, *Black Studies and Anthropology: Scholarly and Political Interests in Afro-American Culture* (Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1972). 特に、"Black Bicultural Experience and the Larger Social System" と題された第7章(pp. 32-37)が、本稿の検討の対象として重要である。
- 26) ヴァレンタインは "Afro-Americanists" という表現をしている。
- 27) Steven Polgar, "Biculturalization of Mesquakie Teenage Boys," *American Anthropologist* 60 (1960): pp. 217-35.
- 28) Valentine, "Deficit, Difference, and Bicultural Models of Afro-American Behavior," p. 142.
- 29) *Ibid.*, pp. 142-43.
- 30) W. E. B. DuBois, *The Souls of Black Folk* (1903: rpt. of the 1953 ed. Millwood, N.Y.: Kraus-Thomson, 1973), p. 3.
- 31) Valentine, *Black Studies and Anthropology*, p. 27.
- 32) *Ibid.*, p. 33.
- 33) *Ibid.*
- 34) *Ibid.*
- 35) *Ibid.*, p. 34.
- 36) *Ibid.*
- 37) *Ibid.*, p. 36.
- 38) *Ibid.*
- 39) *Ibid.*, p. 34.
- 40) *Ibid.*, p. 41.